

熊谷次郎直実の発心譚

古井戸 秀夫

今日は熊谷次郎直実の発心譚というお話をしようと思っています。出家して熊谷入道蓮生^{れんしやう}。浄土宗では「れんせい」と読むそうです。死んだ後、極楽往生して蓮華の上に座る、そういう安定した心を求めた男、もとは戦国乱世の武将、熊谷次郎直実という人の話です。年代年代における熊谷の物語がどういうふうに変容するのか、それは物語の変容なのか、それを受けとめる人たちの心の変容なのか、そんなことを今日は皆さんと一緒に考えてみたいと思っています。

『法然上人絵伝』

最初に、『法然上人絵伝』を考えてみましょう。『法然上人絵伝』では、なぜ熊谷が出家をしたのかという理由を本当に簡単に書いています。頼朝のことですが、「幕下將軍を恨み申す」、とこれしか書かれておりません。

では、どんなことを恨んだのか。『平家物語』など源平の合戦を描く軍記物には、それに関する記述はありません。それに対して歴史書というものがありまして、これが『吾妻鏡』。すなわち、鎌倉幕府が成立したときの頼朝側の歴史です。そのなかには、こう書かれています。彼は源平の合戦で軍功を立てるが、その後、帰ってきて、不満がたくさんあった。それが爆発する。どういう不満かという、自分は戦で手柄を立てたのに、同じように手柄を立てた男が流鏑馬^{やぶさめ}のときに馬に乗っている。俺は下で番人をさせられた。あいつが流鏑馬で馬の上に乗って、俺はどうして徒歩なのだ。これが怒りの最初です。

熊谷は強いけれども弁舌が下手。それに対して、おじさんは弁が立つ。戦では全く手柄を挙げていないのに、次第におじさんの方が領地争いで有利に

なる。最後に、頼朝が二人の意見を聞いた。しかし、頼朝の前でうまくしゃべれなかったので癩癩を起し、自分の髻を切ってそのまま京都の黒谷の法然上人のもとで出家をした。これが『吾妻鑑』に伝えられる物語。『法然上人絵伝』ではこれを、「幕下將軍を恨み申す」と簡単に伝えています。

この当時、戦でいろいろなこと体験して、もう嫌だ、この世を捨てよう、仏の世に生きようという人たちが法然上人のところへ来たようです。熊谷の物語の前に、実は関東から京都の黒谷に行って出家をした五、六人の関東武者の名前が出てきます。その最後が熊谷蓮生で、熊谷の話が一番長い。それだけ心に残る話なのでしょう。

熊谷が仏の道に入ろうと覚悟して京都へやって来ると、だったら法然上人のところへ行きなさいといわれる。法然上人のところへ行きますと、法然上人は、そうかわかった、ただお念仏を唱えなさいという。これを聞いたとき、意気込んできた彼の体中の力が抜けて、自然と涙がこぼれたと書いてあります。

これは熊谷の物語ではなく、法然上人がいかにか偉い人かを伝える物語です。ある武者がやって来て、俺は仏道に入るのだ、という。法然上人が、わかった、じゃあ念仏だけ唱えなさい、といったならば、武者はへなへなへなとなって、涙をこぼす。なぜ、へなへなとなったか。仏教で成仏するためには、大変なことをしなければならぬ。腕一本ぐらい切ろう、足だって切ってもかまわない、命だって捨てる覚悟でやって来た。そうしたら、ただ念仏を唱えなさいというので、へなへなへなとなった。

こうなった男が、どういう行動に出るか、だいたい想像がつかますよね。法然上人の前から離れない。自分は強いから、ボディーガードになったつもりで、ずっとついてまわる。ところが、上人は我々のような庶民のところにも来ますけれど、偉い人のところにも行かれる。そうすると、熊谷は身分が低いから中に入れなさい、と。外で待たされる。すると純朴な男だから、大きな声で言う。仏教では浄土という、そこではこんな差別はないよね。ここは穢土えど、穢れた土地だから、こんな差別をするのか。本人は大きな声で言ったつもりはないのですが、東国の荒くれ武者だから、呟くことができないのです。これを上人が聞くと、中に入れなさい、と。そして、偉い人たちと一緒に話を聞かせてあげた。これも熊谷の人柄を語っているのではありません。こういう人を受け入れるだけの度量というものが、この上人には

おありになったということです。

熊谷の話で、よく知られている話が三つあります。ひとつは浄土宗では成仏、人が仏様になることです、成仏に段階があります。基本は、上品、中品、下品。さらにそれぞれに上生、中生、下生。組み合わせて九段階。ふつう、荒くれ武士で、人を殺したりしてきた人たちは成仏することが難しい。下品下生でもなかなかない。ところが、熊谷は最初から、俺は上品上生でなければ嫌だ、という。何故だと思います？熊谷は人から、苦しんでいる人を救うためには、上品上生しなければだめだと聞いたからです。自分が助かるだけじゃ嫌だ、苦しんでいる人はたくさんいるのだ、と。それを聞いたお上人さまは、また同じことしか言いません、念仏を唱えない。さらに付け加えて「常住西方」。西の方に浄土はあります。ですから、必ず西に向かって、いつもお念仏を唱えなさい、と教えました。

二つ目の話は、その延長線上にありました。教えを賜った熊谷が、京都の黒谷から関東、武蔵の国の熊谷、今の埼玉県くまがやの熊谷に帰ってくる。皆さん、ちょっと想像してください。京都から熊谷まで帰ってくるということは、東に向いて帰って来ます。お侍だから馬に乗っています。そうすると「常住西方」ではなく、「常住東方」になってしまいますね。そこで、この男は後ろ向いて馬に乗った。こういう愚直な男を受け入れたところに、浄土宗は凄い力があるのだろう、という逸話です。

三つ目は。熊谷の最期です。死ぬ前の年の八月、俺は二月四日に死ぬと予告をする。絵伝では、幾千万の人が集まったといいます。しかし、空振りでした。そのときは、まだ早い、今年の九月に死ぬ、と。その最期のときは、あまり人がいませんでしたが、四日前には妙なる音楽が鳴り、そして菩薩が迎えに来て、成仏をして上品上生を果たした、という結末でした。

『法然上人絵伝』の伝える三つ話は、繰り返しになりますが、これは法然上人がいかなる教えを私たちに授けてくれたのかという話であって、その対象としての熊谷蓮生の人間像が生まれたのでした。

『平家物語』

それに対して、同じ時期に成立した軍記物の熊谷とは何か。『平家物語』は、美しい平家の公達が減びていく物語ですね。ですから、主人公は熊谷で

はない。あくまでも滅びていく公達、それが敦盛^{あつもりきょう} 卿 ですね。若干十六歳の貴公子が、健気に死んでゆく。そのとき、熊谷に捕まるわけですね。熊谷は何に感動したのかというと、首を討ったとき、遺品に笛が出てきた。これは『平家物語』では「小枝^{さえだ}」の笛とっていますが、ふつう伝えられているのは「青葉^{ひかりき}」の笛。文献によっては篳篥だという、その笛。いずれにせよ、笛が出てきた。

僕ら子どもの頃、笛吹童子というラジオドラマがありましたが、笛吹童子は突然出てきたのではないのです。日本の貴公子というものは、必ず笛を吹く。その笛を吹く貴公子の歴史のなかで、燦然^{さんぜん}と輝いている一人が、この敦盛卿です。熊谷次郎とその息子・小次郎は、一の谷の合戦の前の日の夜、先がけ、抜け駆けをした。この二人が相手の城の前に来ると、中から管弦、笛の音が聞こえてくる。ああ、平家はすごいな、こんな戦の最中なのに笛吹いている。その笛を吹いていた少年なのです。しかも、その笛は、天皇陛下からおじいさんがもらった笛で、その少年は笛がうまいからといってもらって、大切に最期まで持っていた。

『平家物語』では、結末としてどういうふうを書いてあるかといいますと、「それよりしてこそ熊谷が発心の思ひはすすみけれ」。世の無常を感じたのですね。さらに「遂に讚仏乗の因となるこそ哀れなれ」とあります。「讚^{さんぶつじょう} 仏乗」というのは、仏教を信じようと思っただけのことになったのが、小枝の笛だった。これを「狂言綺語^{きょうげんきご}」という。本当のことではなくてつくりもの。音楽、これも虚構の世界ですね。虚構の世界だけでも、笛の音を聞くと、我々の心が動きますよね。小枝の笛、それが荒くれ男の心を動かしたと『平家物語』ではいつているわけです。

『平家物語』には、敦盛の最期の前に「一二之懸」があります。熊谷親子が抜け駆けをする話です。一の谷で合戦、最初二月四日に合戦を始めようとしますが、この日は清盛が死んだ日、清盛忌だからダメ。では五日。五日は方角が悪い。六日もダメな日。七日の朝に矢合わせをやろうと決まる。しかし、熊谷は七日まで待てない。六日の夜に抜け駆けをします。自分の息子、十六歳の少年、小次郎と二人で抜け駆けをしますが、子どもの方がはやくて、一人で突っ込んで行ってしまふ。それで怪我をした小次郎を助けて帰ります。

その次の日、子どもを陣所に置いて出てところで、敦盛を殺すわけです。

その敦盛の姿を見ると、小次郎のことを思い出す。小次郎と同年だ。平家物語は、だんだん『源平盛衰記』というかたちが変わっていきました。江戸時代には、この『源平盛衰記』が流行することになるのです。『源平盛衰記』では、熊谷が敦盛の首を持ち帰っています。貴公子の首がさらされるのが忍びない。だから、自分が持って帰った。そして、その首どうしたかという、この子にもお父さんがいるだろう、お父さんが悲しんでいるに違いないと、清盛の弟に手紙を書く。お父さんもやっぱり感動して、返事の手紙を書く。その手紙のやりとりのなかで、彼は出家をすることになるというふうに、話が膨らんでいきました。

能『敦盛』

平家の物語、敦盛の物語は、謡曲、お能になります。鎌倉時代が終わって、室町時代になり、そして数十年経った頃、三代義満のもとで世阿弥が『敦盛』という作品を書く。世阿弥は『平家物語』等の軍記物を描くときは、そのまま描きなさいと教えている。本説どおりにやりなさい。だから、彼は貴公子、敦盛を主人公にした。蓮生、これはワキ。それを認める人です。

熊谷が幽霊に頼まれて念仏を唱えるとき、有名な言葉ですが、こう言っています。悪人でも敵でも、善人なら友だちになろう。味方でも、悪人だったら友だちになるのよそう、という言葉は敦盛は引いている。どういうことかという、蓮生はかつては敵だったけれども、今はお坊さんになって善人になった。だから、念仏唱えてくれよ。味方だったとしても、僧侶でない悪人には頼めないことだよ、と。蓮生がお経を唱えると、敦盛は夢のなかで、かつてのように笛を吹き、歌を謡い、舞を舞ってみせた。室町時代、將軍家の庇護のもとに生まれたお能の世界は、『平家物語』本来の、貴公子を中心する物語であって、熊谷はそれを見届けた人ということになります。

舞曲『幸若』

室町時代の後半に、『幸若^{こうわか}』という舞曲が生まれる。『幸若』になると、主人公が熊谷自身になる。この『幸若』の主人公に憧れたのが織田信長です。桶狭間のとき、今川の大軍が通り過ぎて行く。信長は、城の中でじっと我慢

する。そして、わざと天守閣を広げて、相手から見えるようにして酒宴をやった。そのときに謡ったのが「人間五十年、化天（下天）の内にくらぶれば」、敦盛の一節です。人間はわずか五十年じゃないか。生きるも死ぬも一緒だ。ここまで謡い終わると、信長はたった一人で駆け降りて、敵陣に入っていく。従う者は五人、十人。さーっと駆けていって、その勢いで今川の大軍を破るわけです。

信長は自分が天下とった後、幸若に俸禄を与えた。そして信長が滅びた後、家康がそれを受け継ぎます。実は、『幸若』は徳川幕府の式楽、正式な音楽として雇われるのです。

『幸若』は、まさに熊谷の生き方に共感した戦国武将たちの世界が作り出したもの。ここになると、熊谷の出家の理由がすごいです。今度は、首を隠して持って帰ったのではなく、晒されていた首を夜になって盗み取る。そして、それを弔うために出家する。

息子との関係も非常にはつきりしています。息子が戦いから帰って来て、手傷を負っている。そのとき、親はこう言います。「痛手か薄手か」。深い傷か、それとも大丈夫か。しっかりしろと言いたいけれど、周りの目があります。仲間たち、武将たち皆が見ているので、浅手だったら突っ込んで、相手の武将を殺してこい。深手だったら腹を切って死ね。こう言った。息子は、わかったと飛び込んでいって、それつきり姿を見せなくなる。死んだのです。死んだはずの小次郎直家は、頼朝幕下の武将として生きているのですが、『幸若』のなかでは、そうやって消えていった息子というふうには書き変えられている。

『一谷嫩軍記』

『幸若』舞曲の時代を経て、江戸時代になって、宝暦元（1751）年に人形芝居『一谷嫩軍記』が書かれました。『一谷嫩軍記』は、まず人形芝居として書かれまして、それがすぐ江戸の歌舞伎で上演されました。むしろ現在では、人形芝居にも『熊谷陣屋』があるのという人があるくらい、歌舞伎の代表的な演目となっています。

ここで身代わりという考え方が出てきます。大事な貴公子を守りたい、そのために家来が身代わりになる。なかなか受け入れ難い話ですよね。でも、

歌舞伎には身代わりの話が多いのです。身代わりの話は中世末からありますが、この場合、身代わりになるのは人ではなく、神様が身代わりになる「阿弥陀胸割^{あみだのむねわり}」。首を切ったと思ったら、それは阿弥陀様だったというように、身代わりになってくれるのは神様。それが、神様ではなくて人間が身代わりになる物語が生まれてくるところに、江戸時代中期の大きな特色がある。

その当時、仏教の俗説が生まれた、「三世相^{さんぜそう}」。「三世相」は、仏教全体にイえる考え方ですが、江戸時代に生まれてきた日本独特の「三世相」は、それとは少し異なります。皆さんどこかで夫婦の契りを「二世の契り」というのを聞きになったことはありませんか？ 夫婦というのは、この世だけの関係ではなく、あの世まで続く。だから、江戸時代に心中していく若者たちは、この世ではちゃんと結びつけられなかった、でも、お互いにきちんとした恋心を抱いて死んでいけば、あの世で一緒になれるのだ、と。

江戸時代のお芝居で、死んでいく男が女に、女が男に、言う言葉は決まっています。「半座を分けて待っている」。あの世へ行くと蓮の花がある。そこに一人一人座るのですが、半分空けて待っているから来いよ、来てね。これが二世の契り。

ですから、近松の若者たちが死んでいきますね。追いつめられて死んでいくのですが、希望がある。この世では果たせないけれども、きちんと自分たちが信じ合って生きて死ねば、また生まれ変わったときには一緒になれるという希望、期待がある。だから、それを見た若者たちが私も、私もと死んでいったから、幕府は禁止しなければならなくなる。私は、かつてこれを心中シンドロームと名付けました。

皆さん、一世の契りをご存知ですか？ この世だけの関係、それは親子。親子が一番深いと思われるかもしれませんが、そうではない。どういう考え方かという、因縁です。どういう縁があるか。

出雲大社に縁結びの信仰が起るのが、ちょうど江戸時代です。赤い糸を持った神様が全国から集まって来て、赤い糸を引き合う。そうすると縁で結ばれる。たくさんある赤い糸のなかから、ごく限られた人だけが結びつく。つまり、縁が深い、何かあった。そうでなければ結びつかない。だから、二世の契り。親があるから生まれてくる。誰でも親子があるから、これは一世だけの関係なのです。ですから、昔の作品を読んでいると、えっと思うこと

がたくさんあります。死んだ子どもの幽霊が出てくると、親には見えない。周りの人たちには見える。死んだ親の幽霊が出てきても、子どもには見えない。これは、親子は一世だからという考え方が、庶民の間に深く浸透しているからなのです。

一番ひどいのは、主従の三世ですね。主従というのは、夫婦以上にすごい。ひどいな、と僕は思いますね。

江戸時代のお芝居の中に船幽霊のお芝居があります。船の幽霊が出てくる。ふつうはタコ坊主ですが、その船幽霊は美女となって出てきた。傾城の花魁です。それが船頭と問答をする。船頭はお殿様を匿っている。そのお殿様の恋人だった傾城は、邪魔だからといって殺された。なぜ私を殺したのか。幽霊が聞きます。お前にも親があるだろう、親と主君とどっちが大事だ。これ、今聞かれたら大体親ですよ。その船頭は腕組んで考えます。仏教の考え方からすれば、三世の恩があるから、それは主君だ。でも、親の方が大事だと思う。そこで、いろいろ考えた結果どうなったか。今、親が元気なのは、ご主君からお金をいただいて、それで生活しているからだ。だから、親より主君の方が大事だ。これ、無理やりですよ。どう考えたって無理やりだけれど、これは建前なのです。この建前を守らないと、自分の家を守っていけなくなる。

ある侍はこう言っています。自分の体はご主君からの預かりものだ。なぜそんなことを言ったのかというと、なぜあなたは道を歩くときに道の真ん中を歩くのですか、と訊かれた。なぜ預かりものでまん中歩くかということ、昔は、屋根などから瓦が落ちてきた。脇を歩いて瓦に当たっては傷ついてしまう。ご主君に対して申し訳が立たない。そういうふうな教育を受けている。

でも、教育をいくら受けても、ご主君のために死ぬといっても、簡単には死ねないですよ。どういう人たちが決断するかということ、子どものときからご主君と一緒に育った人たちです。そういう生活をずっと一緒にしてきた人たちが、この人のために何とかしようと決断する。大石内蔵助は、その代表ですね。ご主君は悔しかったろう。その悔しいという気持ちを自分の気持ちに置き換えて、ご主君の無念を晴らそうと思う。そういう気持ちが、江戸時代の侍たちに出てくる。そこに出てきたのが、神さまの代わりに人間が身代わりになる物語。たくさんあります。代表的な狂言が『寺子屋』。

『寺子屋』は、自分の子どもの首を切って、ご主君の子どもの身代わりに

する。その首を見て、ご主君の（子どもの）首に間違いない、と首実検やったあと、最後になって出てきて嘆きます。八や九つで死んだ子どもの最期、それから十六歳まで生きた子どもの最期、皆さんどっちの別れがづらいですか？

どこの国も幼児の死亡率は高かった。日本では疱瘡ですね。疱瘡に罹って、たくさんの子が死んだわけです。子どもが授かったからといって、亡くなる確率が高かった。そこで本当に苦しんでいたら生きていけない。だから、その間は軽いのです。ところが八つや九つになると、づらいですよ。

敦盛もそうですが、戦に出て行くために元服して、大人になって出て行ったのです。自立した人間になったときに、死んでいった息子。これも、つらいでしょうね。つらさの違いは、その後の夫婦の行動の違いになっています。

『寺子屋』では、子どもを犠牲にした後、夫婦は一緒に弔います。幼い子どもを亡くした若夫婦は、自分たちの子どもの死骸と一緒に送って、たぶん終生一緒に過ごすのでしょう。熊谷は違います。熊谷は一人出家していく。それは、夫婦というものの関係の一つの年代なのでしょう。実人生は終わった、もう俺は一人で仏教の世界に入って行く。お前はお前で生きろ。同じ子どもを亡くした親であっても、その選択の流れは変わってくる。

『一谷嫩軍記』のその後

『一谷嫩軍記』は、書き下ろしからからもう二百五十年近く経っている。同じ子どもを失った親の芝居は、やはり倫理観の変化によって変わってきます。

義経が出陣の前に熊谷を呼んで、なぞの高札、立て札を託す。「一枝を切らば一指をきるべし」。この桜の花は私が大好きだから、この花を折ったやつ、一枝を切らば指一本。弁慶はお坊さんでしたから、能書だった。だから弁慶にそれを書かせて、その立て札が陣屋に立っている。熊谷は何のこただろうと思う——ああそうか、散っていく花の桜、これは敦盛卿のこただな。もし敦盛卿を斬るのなら、自分の子・小次郎を斬れ、こういつているのだろうととった。なぜなら、熊谷は源氏と平家の間を行ったり来たりした。このお芝居のなかでは、若き日に宮中に仕えていた。そのときに、後に相模と

いう名になる女と深い仲になり、小次郎という子どもを宿す。江戸時代は、不義はお家のご法度で、その場で成敗されます。ところが同じく院の、この院が平家を滅ぼせという院宣を頼朝に出した人物ですが、藤の方という人のおなかに、院の子が宿り、これが敦盛卿です。この藤の方が二人を助けてくれた。助けてくれて、東に下って、武蔵の国で子どもが生まれ、十六年。敦盛卿として育った子どももいれば、敦盛として死んでいく子どももいる。かつの御恩ですね。御恩返しのために斬りなさいという。

最後の場面は、現行の型が二つあります。「芝翫型」と「團十郎型」。ほんらいの人形浄瑠璃の演出を踏襲するのが「芝翫型」。平家方と源氏方が分れて、こう言います。「ご縁があらばと女同士」。縁があつたらまた会いましょうね。「命があらばと男同士」、こう言って別れていく。そのときに、義経を中心に五人が並ぶ。これは「絵面えめんの見得」といまして、全員が揃って終わる。ですから、個人の物語ではなく、対立する両家、夫婦、男と女、そういう人間関係のもとで起こった悲劇だというのが、本来の物語でした。

実は、熊谷は出家しましたが、息子は生きていて、ちゃんと継いでいる。熊谷は出家するとき、息子に三つの遺訓を残しています。主君を裏切るな。侍の道を守れ。仏教信じろ。後の二つは簡単ですが、ひとつ目はなかなか理解し難い。こういつています。俺は戦争でたくさん活躍した。そのために頼朝の御判が押された所領の安堵状を七つ。さらに軍中御感状（手柄を立てたという書面）、それを二十一通、持っている。出家する人がそんなことに執着していいのでしょうか。

これを褒めている人がいる。それが山鹿素行。素行には弟子たちがまとめた『山鹿語類』があって、これに書いてある。「蓮生すでに発心に入って万事をなげうつと雖も子孫に対してその職分を守らしむ。尤も士の志を忘れずと言うべきなり」。士ものふとは何か。すなわち、これだけ手柄を立てたということは、本領が安堵される。安堵されたものはお前に受け継がれる。お前が受け継いだものを、また子孫が受け継いでいく。これが士の志だ。出家をしてすべてのものを捨て去っても、この熊谷はもののふとしての精神だけは忘れなかった。こういうふうに山鹿素行は言っているのです。

『一谷嫩軍記』の作者もこういつています。自分の子どもを犠牲にして、出家を願った熊谷に対して、義経が言います。「それ武士の高名誉れを望むも、子孫に伝えん家の面目」。なぜ皆一生懸命戦うのか、それは子孫に伝え

たい、その一念じゃないか。その伝えるべき子を失って、世をはかなんで出家するのだな。もっともだ、と義経が言うわけです。今、そんなところを聞いてる人はいませんよね。でも、本来の姿はそこなのです。

「芝翫型」は有髪の僧です。僧侶というのは、必ずしも丸坊主にしなくもいい。髪があってもいいのです。ただ、髻もどりを切らなければならない。『吾妻鏡』でも髻を切っている。それに対しまして、團十郎型は丸坊主です。世捨て人の姿を強調する。

「芝翫型」は、最後は絵面の見得、「團十郎型」は幕外。「三重」という三味線の音。三味線ひきが舞台の前に一人出てきて弾く、その三味線の音を聞きながら、熊谷はしずしずと入っていく。そういう型をつくり上げた。幕外のセリフ。「今は早、なに思う事なかりけり、弥陀の御国に行く身なりせば」。もう何も思い返すことはない。仏教の世界に行くのだから。執着心なんか何もないと言いつつ、自分の過ごしてきた十六年を思うわけです。「十六年はひと昔、アア夢だ、夢だ」。このセリフもいいセリフだと思いますけども、原作の淨るりの文句がいい。「ほろりとこぼす涙の露、柵に置く初霜の、日影に溶ける風情なり」。柵ひいらぎの葉を見たことありますか？ ギザギザで尖っているでしょ。熊谷の涙がそこにパッと落ちる。すると、お日様が出てきて初霜が解けますね、その風情なのだ、と。三味線は「憂い三重」といまして、悲しい気持ちかねを表現する。「ドドン、ジャン」、「ドドン」は太鼓、「ジャン」は鉦かねの音。これは戦場の音です。この「ドドン、ジャン」に法螺貝が入る。もう世を捨てて何も考えないで行こうと思うけれども、「ドドン」と鳴った途端に、ついこのあいだまで武士だったから、体がはっと反応する。ああ、いけない、いけない、忘れよう。と、また「ドドン」と鳴る。もう聞かまいと、編笠で耳を塞ぎ、花道を駆けてはいる、これが「團十郎型」の演出です。

衣装も、芝翫型は「赤金襦あかきんらんの黒天くろてん」。黒天の「天」はピロードを表す言葉の一字、だから黒ピロード。ピロードの小袖を着て出てくる。江戸時代、ピロードを着るなど許されません。赤金襦というのは、赤地の錦に金糸で模様をとっている、袴かみしも。これも許されない。戦国時代の余風でした。現実の武将ではなくて、昔々の武士。それを描いている。それに「芝翫隈」という隈取をとる。いわゆる様式美すぎがんあみ。杉麿阿弥（生没 1870-1917 年）という当時の劇評家は、「形容における芝翫、精神における團十郎」と評しました。心

を描いているのは團十郎だ、見た目がきれいなのは芝翫だ。團十郎の方は丸坊主になって幕外の引込み、憂い三重で引込む。着ているものも織物の袴。前半は普通の袴で、袴が短い。後半は長袴に着替えます。模様はのしめ熨斗目。熨斗目はお大名が江戸城に行くときに着るもの。ただ、それが豪華になっている。赤金襴も虚構であれば、織物も虚構ですが、織物の虚構は見て違和感のない虚構。それに対して赤金襴や黒天は、おとぎ話というほど大きな違い。ですから、團十郎型は、現実に近い姿を見せようとしたのだろうと思うわけです。

『平家物語』の熊谷は、世の無常を感じて出家。『法然上人絵伝』では、出家しても純朴な関東武者の姿が描かれました。能『敦盛』はその延長線上にありました。舞曲『幸若』、能『敦盛』にいたって、はじめて父親熊谷が主人公になります。『源平盛衰記』の熊谷も、その世界の主人公でした。江戸時代に生まれた『一谷嫩軍記』の熊谷は、同じ父親でも家を守ることが課せられていました。「團十郎型」ではその家よりも父親熊谷の個人的感慨が優先されます。これも歌舞伎の近代化の一つでした。現代の我々は、熊谷をどのように受け止めているのでしょうか。